

# こども環境学会 2007年大会（横浜） 概要報告

## テーマ「こども・まち・おとな」

### —キッカケの扉を開こう—

#### ■開催概要

開催日：2007年4月27日(金)～29日(日)

会場：横浜市開港記念会館(神奈川県横浜市)

共催：横浜市、東京ドイツ文化センター

後援：国土交通省、文部科学省、厚生労働省、環境省、神奈川県、神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会、日本学術会議、(社)日本ユネスコ協会連盟、(社)日本ユニセフ協会、(社)日本建築学会、日本環境教育学会、(社)日本都市計画学会、(社)日本造園学会、日本発達心理学会、(社)日本体育学会、日本保育学会、日本子ども社会学会、日本安全教育学会、人間・環境学会、(財)国際交通安全学会、(社)日本公園緑地協会、(財)公園緑地管理財団(財)都市緑化基金、(財)都市緑化技術開発機構、(社)日本建築家協会、(社)都市計画コンサルタント協会、(社)日本造園建設業協会、(社)日本公園施設業協会、(社)全国建設室内工事業協会、日本子どもNPOセンター、NPOチャイルドライン支援センター、IPA 日本支部、神奈川新聞社(順不同)

◆参加者数：約550人(3日間の延べ人数は約1,000人)

27日エクスカッション：約40人、28日国際シンポジウム：約300人、28日総会：出席62人+委任198人=合計260人>185人(定数)、29日学会賞受賞者講演会・特別シンポジウム・総括セッション：約200人、演劇ワークショップ：20人、8つの分科会：約400人、ポスターセッション参加：46件

#### ■第1日：4月27日(金)

##### ◆エクスカッション

コーディネーター：木村歩美(本会理事)

ゆうゆうのもり幼保園、うさぎ山プレーパーク、川和保育園の3つのこどものための環境づくりと体験活動に努力されている施設を、40名の参加者が視察し意見交換した。

##### ◆学生シンポジウム「遊びの選択肢を広げよう」

コーディネーター：渡辺龍彦(慶応大学)

①こども環境学会学生部コトナ、②だがしや(早稲田大学)、③ちびくろ(武蔵野美術大学)、④たけのこ(横浜国立大学)こどもを対象にワークショップを实践する学生たちの活動報告とこどもたちの遊びの選択肢を広げる工夫が論議された。

#### ■第2日：4月28日(土)

##### ◆あいさつ：

織田正昭(本会副会長)、岸本孝男(横浜市こども青少年局長)、仙田満(本会会長)、ライナー・ブーツ(東京ドイツセンター)



##### ◆基調講演「こどもが育つ空間をどう創り出すか」

高橋勝(横浜国立大学・教育学：大会実行委員長)

近代啓蒙思想としての教育だけではなく、「群れ」としてのこどもが育つ「土地に固有の物語」が必要であること、こどもへの「まなざし」は、大人の自己理解の反映であり、大人とこどもが育ち合う空間づくりが必要であると説いた。



##### ◆国際シンポジウム「こども・家族に優しい都市(まち)」

コーディネーター：木下勇(千葉大学)、織田正昭(東京大学)

①ゲルト・グリューナイズル(文化と遊び空間)+②マーギット・マシェク・グリューナイズル(同上)「遊びの街・ミニミュンヘンは、インフォーマルな学習」

ミュンヘンで1970年代より始まった「遊びの街」での自主的な遊びの中での社会学習の様子が紹介された。

③前田正子(前横浜副市長)「こども・家族に優しい街づくりへ」横浜市が子ども青少年局を中心に「かがやけ横浜子どもプラン」などの子育て支援政策において、地域力・成長空間・共生社会を創ることを目指していると報告。

④アーニー・クローマ(フィリピン演劇協会)「こどもを育てるにはコミュニティが必要」

自身の演劇的手法によるこどもに優しい都市環境づくりの有効性と心理・社会的仲介がこどもたちの心を支えることを提起。

⑤陳美静(ソウル大学)「韓国の家族人口学的変化とこども政策」韓国における少子化と家族の変化に対する政策の現状を報告。国際シンポジウムのまとめとして、国際的な問題の共有によるこどもが「群れて遊ぶ」都市環境づくりの重要性が確認された。



##### ◆第2回(2006年度)こども環境学会賞発表

論文賞1件、論文奨励賞1件、デザイン賞3件、デザイン奨励賞3件、活動賞2件、活動奨励賞4件が発表され、授与された。

##### ◆2007年度総会

2006年度事業報告、2006年度決算、2007年度役員就任、2007年度事業計画、2007年度予算が報告・提案され、承認された。

##### ◆懇親会

BankART Studio NYKで開催中のイベント「地震エキスポ」の展示会場で行われ、海外のゲストを交え約120人が参加した。

#### ■第3日：4月29日(日)

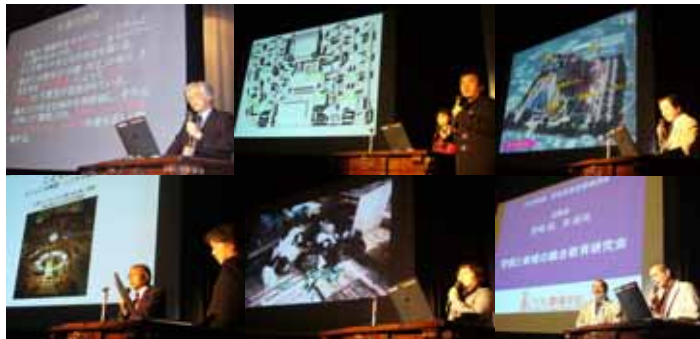
##### ◆学会賞受賞者講演会

論文賞1件、デザイン賞3件、活動賞2件の受賞者による講演会。

①根ヶ山光一(早稲田大学)／論文賞『「子別れ」の視点から見たこどもと環境の関係に関する発達行動学的考察』

②小嶋一浩、赤松佳珠子(シーラカンスアンドアソシエイツ)／デザイン賞『千葉市立美浜打瀬小学校』

- ③ 辻吉隆（厚生労働省医政局国立病院課）／デザイン賞『国立成育医療センター』
- ④ 若盛正城（学校法人まつぶし）、入之内瑛（建築計画研究所都市梱包工房）／デザイン賞『松伏町幼保園こどものもり』
- ⑤ 中川美穂子（全国学校飼育動物獣医師連絡協議会）／活動賞『小学校への動物飼育の教育的な意義と獣医師の支援システム構築への啓発活動について』
- ⑥ 宮崎稔、岸裕司（学校と地域の融合教育研究会）／活動賞一子育ち・まち育て・学校づくりを三位一体で実践を積み重ねてきた10年の活動一



◆特別シンポジウム「道草のできるまちづくり-車社会から子どもを守る」  
コーディネーター：今井博之（クルマ社会を問い直す会）

- ①道草の意義、こどもの目線から見た道／水月昭道（立命館大学）
  - ②地域で車の危険から子どもを守る改善のとりくみとその課題／城所哲夫（東京大学）
  - ③こどもの交通事故の現状、排ガスによる大気汚染などの問題とその改善策／上岡直見（環境自治体会議環境政策研究所）
  - ④市民が自発的に交通手段や暮らし方を変えていく対策、教育実践のとりくみ／谷口綾子（筑波大学）
- ヨーロッパでの生活道路の試みの紹介、日本では車社会が子どもに与える社会的・心理的影響への配慮の不在の指摘、通学路での危険をなくす方法、車に頼らない生活への移行の提案などがなされた。道は子どもにとって、身近な遊びと発達の場で、楽しい道づくりが必要である。



◆演劇ワークショップ「イジメ問題を考える」

ファシリテーター：アーニー・クローマ（フィリピン教育演劇協会）  
20名の参加者が3つのグループに分かれて、それぞれ「家庭」「学校」「地域」の3つの場におけるいじめを再現する寸劇と問題の解決方法を表現する歌を創り、総括セッションにおいて発表した。



■分科会(27日～29日)

3日間にわたる「子ども」「まち」「おとな」に係わる8つの分科会で活発な議論が交わされた。( )内は、コーディネーター。

「乳幼児期の遊びの大切さと、その環境づくり」(奥瀬純一、橋本ミチ子)：遊び力の再発見と育成、公園遊びのサポーター、遊ぶ環境をつくる、大人が遊ぶことの大切さ。

「保育制度と保育実践をつなぐ」(木村歩美)：保育制度はよりよい保育を支えるため、施設や制度より人の思いはもっと大事。

「学校と地域の協働」(高橋勝)：学校に地域情報センターを、コミュニティスクール、アフタースクール、地域の子育ての責務。  
「子どもとメディア」(玉田雅己)：・話題共有のツール、メディアリテラシー、心を通わせるためのメディア、大人が学ぶ必要性、リスクと付合うことを学ぶ必要性。

「支え合いと連帯による子育てに優しいまちづくり」(大豆生田啓友)：当事者が中心、民と行政の協働は中間支援が必要、専門機関のネットワークも、身近な子育て広場が必要

「遊んで創るまちづくり」(三輪律江)：子どもが自分を発見するツールとして、大人が任せるきっかけとして。

「大人たちのワークライフバランスを考える」(黒岩佐和子)：自分らしく生きる、お父さんを当事者として楽しもう、生活の共有、問題の共有。

「青少年の自立」(神谷明宏)：知的障害者の自立も共通問題、多様な青少年のための場、NPOなどの資金や人材が不足。



■ポスターセッション(27日～29日)

A「学術研究・調査活動等の発表」29件、B「非営利団体の活動紹介」15件、C「企業等の活動紹介」2件、合計46件の発表があった。テーマは、学校・幼稚園や児童施設などの建築や都市環境、教育活動やプログラム、遊具やプレーパークなどの遊び支援活動、子どもや市民参加のワークショップやまちづくり、企業による支援活動など広範にわたり、熱心な発表と質疑が行われた。優秀ポスター発表賞は、以下の5名が受賞した。青木一郎「児童の意識よりみた児童養護施設の評価に関する研究」、玉田さとみ「自分たちの手で、夢の学校をつくる!」、桑原淳司「遊び環境活性化の試み 移動式シンボル遊具の提案: Acchi・Cocchi あっちこっち」、磯部錦司「自然環境への意識の変容を生み出す造形活動についての研究」、柿本美樹枝「建築士による子どもと楽しむ! 住まいワークショップ」。



◆総括セッション

大会提言に向けて、3つのシンポジウム、8つの分科会、演劇ワークショップからの報告とフロアからの意見を整理した。フロアからは、子ども環境学会の役割の重要性、問題への関心が低いことへの危惧、もっとディスカッションの場を、土地利用としてのこどものまち、学生からの提案の機会を、などの意見が出された。全般的な総括を下記にまとめる。

1. 子どもとおとなが共に暮らせるまちをつくろう
2. 子どもが群れて遊べるまちをつくろう
3. 子どもが参加できるまちをつくろう
4. 乳幼児期のこどもの保育、教育の質を確保しよう
5. メディアを活用できる力を育てよう
6. 学校と地域の協働を促進しよう
7. 子ども、家族に優しい都市(まち)をつくろう

これらを再整理し、次ページの大会提言として発表した。

【2008年度大会予定】2008年4月25日(金)～27日(日)  
名古屋地域において開催予定です。ご期待ください。

## こども環境学会 2007年大会（横浜）提言 「こども・まち・おとな」



こども環境学会  
Association for Children's Environment

こども環境学会 2007年大会（横浜）は、2007年4月27日～29日まで、横浜市開港記念会館にて開催し、約550名の方々が参加されました。国際シンポジウムを含む3つのシンポジウム、8つの分科会、ポスターセッション、ワークショップ、エクスカージョンなどが実施され、「こども・まち・おとな」をテーマに活発な議論が交わされました。これらのまとめとして、以下の3項目をここに提言し、これらの推進を呼びかけます。

「まち（地域・都市）」がこどもたちを育み、そこで育ったこどもたちが「まち（地域・都市・世界）」を育んでゆくことが必要です。まちを舞台に、親子、家族、学校、地域、都市、国、国際のレベルにおいて、こどもとおとなが物理的、社会的、心理的空間を楽しく共有し、問題解決に向けて認識を共有し行動を起こしましょう。

2007年5月

こども環境学会 会長 仙田 満  
同 大会実行委員長 高橋 勝

### 1. こどもが群れて遊べる<sup>まち</sup>都市をつくろう

都市と農村を問わず、こどもが、道、原っぱ、空き地等で、群れて遊ぶ姿が見えなくなりました。これは、こどもが外遊びをしなくなったのではなく、安心して遊べる場所が、家の外では消えつつある現実を意味しています。まちは、もはや子どもの居場所や冒険心をかきたてる場所ではなく、車や見知らぬおとなの犯罪に巻き込まれる危険に満ちた場所に変貌してきました。学校帰りに道草ができ、群れて遊べる場所を再び創り出すためには、車優先の社会を見直し、人間関係の輪が広がる地域コミュニティづくりが早急に求められます。

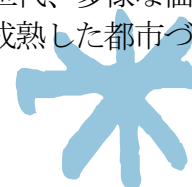


### 2. こどもとおとなが共に暮らせる<sup>まち</sup>都市をつくろう

都市化、産業化の進行によって、こどもが群れをなして遊び、戯れ、活動する場所がますます狭められてきています。これは、機能性、効率性ばかりを追い求めてきたおとな社会の負の遺産でもあります。こどもの遊ぶ姿が見えるまちを回復するには、まずおとな自身が、こどもの問題はおとなの問題でもあるという認識を共有し、真に「豊かな暮らし」の価値に気づき、それを取り戻すための第一歩を踏み出すこと（キッカケの扉を開く！）からはじめる必要があります。

### 3. こども、家族に優しい<sup>まち</sup>都市をつくろう

都市は、単に人が働く場所ではなく、人が住まい、他者と出会い、関わり合い、情報や感情を交換する場所でもあります。発展途上国型の都市では、生産性と機能性が最優先される傾向にありますが、成熟した都市には、こうした多様な世代、価値観が交じり合える暮らしの場としての都市空間、つまりこども、家族に優しい都市であることが求められます。そこは、こども、若者、おとな、高齢者、異国籍の人々など多様な世代、多様な価値観を受容し、共生できる場所でもあります。こども、家族への着眼は、成熟した都市づくりのための不可欠の条件と言わなければなりません。



## **Proposition**

### **from the 2007 Yokohama Convention of Association for Children's Environment Main Theme: "Children, City and Adults: Let Us Open the Door of Opportunity"**

The participants of the 2007 Convention of Association for Children's Environment held at the City of Yokohama Open Port Memorial Hall in Yokohama on 27-29 April, 2007, Considering active deliberation through three symposiums including International Symposium, eight sectional meetings, poster sessions, a workshop, an excursion and other events organized under the main theme of "Children, City and Adults: Let Us Open the Door of Opportunity" and having recorded the total enrollment of some 550, Recognizing the importance of the community, or the city or the region, raising children and the children raised as such raising the community, or the city or the region, in turn, Bearing in mind that it is essential for both children and adults, in all levels of a parent child relationship, family, school, community, city, nation and international communities, to have physical, social and psychological spaces in common with pleasure, to share understanding toward problem solving, and to take positive action, Have agreed upon the following three proposals and have made an appeal to the public for their promotion:

#### **1. Let Us Build the Community for Children to Play Together in Groups**

We seldom see children playing in groups in streets, open fields, vacant lots or others today, wherever in a city or in a rural area. This is not because children do not want to play outside any more but because it is getting more and more difficult for them to find places to play at ease outside home. Our community is neither a place for children to comfortably stay in nor one stimulating an adventurous spirit for play any longer, and has been undergoing a transfiguration into one filled with vehicles and dangers of being implicated in the crime committed by stranger adults. To recover places accommodating children's needs such as loitering on their way home from school and playing together in groups, all parties involved without delay shall reconsider our present society giving automobile the highest priority and shall strive for the building of communities expanding human relations.

#### **2. Let Us Build the Community Livable for Both Children and Adults**

Urbanization and industrialization in progress to date have reduced places for children playing together in groups, frolicking happily and participating in activities. This may be viewed as a negative inheritance of adults' society only pursuing functionalism and efficiency. To recover the community with children playing, adults themselves at first shall share an understanding that children's issues are at the same time adults' issues, realize the value of truly affluent living, and take the first step of getting it back. Let us open the door of opportunity!

#### **3. Let Us Build the Child- and Family-Friendly Community**

The community in our cities is not just a working place but is a place to live in, to meet others, to make exchanges, and to communicate information and views. In developing countries, utmost priority might be given to productivity and functionalism. To be fully developed, however, the community in our cities shall offer spaces suitable not only for living but also for the exchange of various generations and multiple cultural values, and shall mature into the child- and family-friendly place to live in. It shall accommodate all generations of children, youths, adults and aged persons as well as foreigners, etc., and accept diverse values in a symbiotic relationship. It needs hardly be said that attention to children and families is an indispensable requirement of building matured communities.

May, 2007

President of ACE, SENDA Mitsuru

Director of the 2007 Convention of ACE, TAKAHASHI Masaru